

家庭学習・学習習慣・学習意欲の育成とノート指導 (1)

栞原昭徳・山下直子*・草野啓顕**・竹下真生***・鈴木 幸****

Upbringing and Notebook Guidance of Home Learning,
Learning Custom and Learning Will (1)

KUWAHARA Akinori・YAMASHITA Naoko・KUSANO Hiroaki・
TAKESHITA Maki・SUZUKI Saki

(Received 2006.9.29.)

キーワード：家庭学習・学習習慣・学習意欲・ノート指導

1 ■はじめに

これまで栞原は、多くの小中学校での校内授業研究会に参加してきたが、初めて出会う教師の口から、家庭学習や学習習慣や学習意欲に関して、次のような言葉を聞くことが多かった。たとえば、「この学校（地域）の子どもは家庭学習の習慣がない」とか、「この学級の子どもは学習意欲が乏しい」とか、「この学級には家庭学習をしない（できない）子どもがいる」とか、「この学級には宿題を忘れてくる子どもがいる」などの言葉である。

これらの言葉に共通しているのは、その教師が「家庭学習・学習習慣・学習意欲」などを、自分の教育力や指導力とはまったく関係ないこととして考えているという点である。教育という仕事を、まるで自分とは関係のない自然現象のようにとらえている教師が数多くいるということである。それも、小学校よりは中学校の教師に多い。

栞原は、家庭学習や学習習慣や学習意欲についても、教師が学校での授業指導を通して育成する対象の一つであると考えてきた。1999年8月に発行された『授業研究 重要用語300の基礎知識』中の「生活習慣・学習習慣」の項で、栞原は以下のように述べて、学校における授業のあり方がそれらを育成する鍵を握っていることを強調してきた。

「学校における授業中の自主的な学習習慣は、もっぱら教師の授業指導の力量に対応する。教師は、その時間にふさわしい学習内容を指導するとともに、子どもみずからが自主的な学習を進めるための道具としての、その教科に独自の学習方法をも指導しなくてはならない。

家庭での自主的な学習習慣についても、じつは学校での授業指導の延長として、教師の指導力しだいであることを見逃してはならない。つまり、発展的な家庭学習をも見通した授業での学習指導を目指さなくてはならないのである。

学校での授業指導は、家庭での自主的な家庭学習や発展学習が可能となるように、宿題の一部を授業の中で解決するなど、家庭での自主的な学習にとりくむための糸口をつかませる必要

* 北九州市立赤坂小学校教諭

** 北九州市立永犬丸小学校常勤講師

*** 山口大学大学院教育学研究科修士課程

**** 山口大学大学院教育学研究科修士課程

がある。」(注1)

現在、ほとんどの小中学校の現場で「学力向上」が学校全体の教育目標の一つに掲げられている。そのせいもあって、本来の授業における学習指導の理論や方法技術とともに、家庭学習の指導方法、学習習慣や学習意欲の育成に関する講話や指導助言の要望も多い。週五日制の現在においては、学校での授業指導だけで学力向上を達成することはできない。日常の授業において活発な学習活動が展開されるとともに、宿題・家庭学習の習慣を身につけたり、授業での意欲的な学習活動ができたり、いずれは、相対的にはあるが、子どもの「学習の自立」が目標とされなくてはならないのである。

L. クリングベルクは授業を見る視点の一つとして「認識と練習の統一」(注2)を挙げている。ここでいう「認識」とは、授業の中で子どもたちが習得する知識や認識をさす。また、「練習」とは、授業の中で習得した知識や認識を習熟し定着する活動をさす。授業では、新しい知識や認識を習得する認識活動が必要であるし、同様にまた、習得した知識や認識を定着する練習活動も必要である。授業においては、認識活動も練習活動も必要であり、どちらかが抜け落ちると授業ではなくなるというのである。授業へのこの視点こそ、日本の授業実践の現在に多大に貢献するドイツ教授学の智慧である。

授業において新しく認識したことを練習し習熟して定着することも、教師の仕事なのである。練習し定着した結果、新しい認識は子どもたちの自主的な活動を通して、自動的になされる仕事となる。授業において獲得された新しい認識は、自動化されて、子どもたちが自分の力だけでできるまでに定着しなければならない。認識過程のみならず、練習過程を含めて、厳密な意味での授業指導というのである。

以下には、子どもたち自身が自動化することのできた家庭学習(宿題)の事例を挙げながら、家庭学習・学習習慣・学習意欲の育成の事実と、その際にノートを中心とした教科経営が実践的有効性を持ちえた事実を述べる。

2 ■ 入学1ヶ月後の小学校1年の家庭学習

1973年4月、栗原は公立小学校(広島県安芸郡府中町立府中小学校)から広島大学附属小学校に異動して、小学校1年生を担任することになった。教職3年目の4月である。

小学校1年生の算数の1学期の内容の中に、「一位数+一位数」の単元がある。たとえば、「2と3は5」だとか、「5と6は11」などの計算を式で解くという問題である。入学式直後の授業から、子どもたちに黒板での発表の仕方を指導し、子どもたちが習熟することを心がけてきた。教師が「 $2+3=$ 」という問題を板書すると、子どもたちはすぐに各自のノートに問題を書いて解きはじめる。そのあと、黒板での発表である。

C1 「ぼくは黒板のところで発表します。みんな、いいですか」

C a 「いいです」

C1 「みんな聞いてください。この2というのは、○が2つのことですね」

C a 「はい」

C1 「3というのは、○が3つのことですね」

C a 「はい」

C1 「この(+) 足すというのは、2と3を合わせることですね」

C a 「はい」

C1 「だから、この2つの○と、3つの○を合わせます。みんな数えてください」

Ca、C1の指示棒の先を見ながら「1、2、3、4、5」と数える。

C1 「みんなで数えたら5になりましたね。だから、答は5です。いいですか」

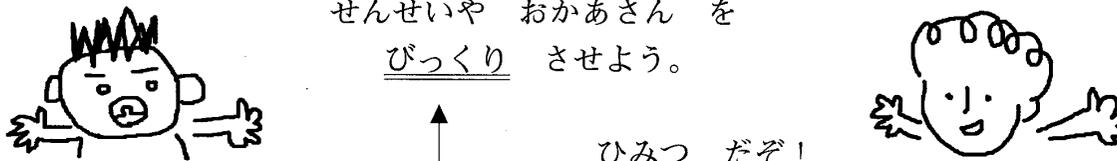
Ca 「いいです」

このような発表の仕方と聞き方ができるようになったころ、今度は自宅での家庭学習ができるようなノート指導にとりかかった。

まずは、学校での算数授業の中で、「一位数+一位数」の問題が解けはじめた時点で、算数のいわゆる「道具箱」の中に入っているサイコロ2つを利用して、振って出たサイコロの目の数で足し算の式を自分でノートに書いて、それを解くという活動に取り組みさせたのである。重要なことは、宿題として家で取り組ませるまえに、学校の授業でその活動方法に慣れさせておくということである。

この宿題「サイコロを使った足し算練習」をめぐる実践は、1973年5月21日から25日までの学級通信「なかま」に記録されているので、以下に紹介する。

1 ●学級通信「なかま(第31号)」より(1973年5月21日)



せんせいや おかあさん を
びっくり させよう。

↑ ひみつ だぞ!

きょう、がっこうで あたらしい さいころべんきょうを ならった。
「5 と 3 は、8」というのを さいころを ふりながら べんきょうして
いくのだ。
これは、いえでも どんどん できるぞ。
せんせいや おかあさんを びっくりさせよう。
ぼくは、ほんのすこしなら おどろかないぞ。
.....

おとうさん、おかあさんへ
今日は算数で加算の初歩を学習しました。
もうすでに知っている子もいましたが、その子にとっては新鮮な気持ちで勉強でき
なかつたようです。「先回り教育」は、意外と効果のないものです。それだけ学校で
気をぬいているのですから。大きな目で子どもを育てましょう。
今日、子どもが自分で勉強するようでしたら、オーバーくらいに賞賛しましょう。

これが小学校1年生の子どもたちへの宿題「サイコロを使った足し算練習」である。この宿題は、自分でサイコロを振る活動がおもしろらしく、ついでに問題を作っては解いていくということで、短時間のうちに自己完結することも取り組みやすい要素の一つである。ノートの表紙には、1学期の最初から「ナンバー(だい1ごう)」が書いてあり、ノート1冊を終わらせるということも、活動の原動力になったようである。ノートの使い方にも慣れた時期でもあり、小学校1年生としては、取り組みやすい問題である。

栗原は、小学校1年児童に対して学級通信「なかま」を発行していた。上記の通信は「31号」である。当時は毎日発行していたので、「31号」ということは、子どもたちが学校に来はじめて「31日目」ということである。

読者は小学校1年の子どもであり、その日のうちに発行することを心がけていたので、余白に入れるカットはもっと簡単で雑な絵である。(本論の筆者の一人、竹下が入力した)。栗原の学級通信は、上記のように1年児童が読める「ひらがな」で、ほとんどの日がB5判1枚のガリ版刷りの手書きプリントである。ときに記事の多い日には、B4判の1枚になることもある。多くの場合、学級通信の記事を書くのは、子どもよりも早く給食を終えて、短時間で書いてきた。

通信の見出しにもあるように、子どもたちに対して栗原は「せんせいや おかあさん をびっくりさせよう。ひみつ だぞ!」と教師と子どもとの間の秘密にすることによって、家庭での宿題の原動力を引き出すという方法をとっている。

また、記事に「きょう、がっこうで あたらしい さいころべんきょうを ならった。」とあるように、文章は簡潔、明瞭である。続く文章にも、工夫が施されている。

「『5と3は8』というのを さいころを ふりながら べんきょうしていくのだ。これは、いえでも どんどん できるぞ。せんせいや おかあさんを びっくりさせよう。ぼくは、ほんのすこしなら おどろかないぞ。」

けっして「たくさんやれ」と、直接的に言っているわけではない。子どもたちが少々がんばっても、「先生は驚かないぞ」と言っている。そして、「おとうさん、おかあさんへ 今日算数で加算の初歩を学習しました。」と学校での授業の様子を知らせ、協力を呼びかけているのである。

2●子どものノート (1973年5月21日)

その日の夜、家で宿題をしたあと書かれたものである。

きょう、ひとりで おべんきょうお(ママ)しました。おかあさんが びっくりしました。おかあさんに ほめられました。

(栗原、朱書き)「いやあ、せんせいも びっくりしたよ。よくやるもんだなあ。」

この男児は「きょう、ひとりで おべんきょうお(ママ)しました。」と、自分ひとりの力で勉強をしたと、自信をもって書いている。学校の授業で宿題の端緒に着手しておく、ほとんどの子どもにとって、宿題は「取り組んでみたい仕事」に変化するのである。

子どもが書いているように「おかあさんが びっくりしました。おかあさんに ほめられました。」というのも、事実であったようだ。このあと示す母親の手紙の文章が述べているように、日ごろ、家で勉強しなかったようである。

そのノートへの朱書きは、「いやあ、せんせいも びっくりしたよ。よくやるもんだなあ。」と、その子のした行動への賞賛をしているだけである。

3●母親からの手紙

上記の子どものノートの1ページを使って、母親が次のような手紙を寄せてくれた。もちろん、栗原は、翌日、教室で読むことになった文章である。

5月21日

今日も楽しそうな様子で学校から帰ってまいりました。そして、いっきに学校であったことを話してくれました。学校での話をするときの顔はいつもかがやいているようです。用事のため、出かけて帰って見たら、息子の姿がみえません。また遊びに行ったのかと思っていますと、机のある部屋からすごく楽しそうな声が聞こえます。のぞいてみたら勉強しているのです。それも、すごくたのしそうに。サイコロをふっては、ノートに何かやっているのです。いっしょうけんめいでした。①私がのぞいたのも知らないで・・・。

その姿をみて、胸がきゅっとなりました。うれしかったです。とにかく、じっとすることの苦手な息子が机に向かっているだけではなく、いっしょうけんめい勉強しているのです。いつものように、「勉強があるのでしょうか。」と声をかけられなくても、自分でやっているのです。それも、たのしそうにです。②たまたま気分が良くてしたのかもかもしれません。まだまだ気まぐれだとは思いますが。一度だけ見て喜ぶのは、親バカかかもしれません。でも、うれしかったのです。

今日の様子は、先生の指導なくしては絶対に見られない姿だ③と思います。ありがとうございます。今日の様子、あまりにもうれしかったので、一言、先生にお礼が言いたくて、このノートをかりました。人一倍迷惑をかけていることと思います。よろしくご指導お願いいたします。

母より

（栞原、朱書き）「いや、ぼくも、うれしいです。」

上の母親からの手紙を読むことによって、大きく、次の三つの指導方法を学ぶことができる。

①「サイコロをふっては、ノートに何かやっているのです。いっしょうけんめいでした。」

母親が「出かけて帰って見たら、息子の姿がみえません。また遊びに行ったのかと思っていますと、机のある部屋からすごく楽しそうな声が聞こえてきます。のぞいてみたら勉強しているのです。それも、すごくたのしそうに」勉強をしていたというのである。学校の授業で指導したサイコロを使うという勉強の仕方（学習方法）が定着していて、文字通り家でも「自動的に」再現できたのであった。

②「じっとすることの苦手な息子が机に向かっているだけではなく、いっしょうけんめい勉強しているのです。いつものように、「勉強があるのでしょうか。」と声をかけられなくても、自分でやっているのです。それも、たのしそうにです。」

日ごろ、自分から机につくことのなかった男児が、サイコロをふっては、ノートに何かやっている」というのである。2つのサイコロをふりながら、出た目で「5+2=」などと問題を作って書いては、ついでに答も書いていく。それだけで、自己完結してしまっていて、次の問題に進むこともできる。やる気さえあれば、たくさん問題を、長時間にわたってすることもできる。もちろん、すぐに中止することも可能である。

③「先生の指導なくしては絶対に見られない姿だ」

勉強する息子の姿を見た母親は「その姿をみて、むねがきゅっとなりました。うれしかったです。」と真情を吐露してくれている。そして、この子どもの事実は「先生の指導なくしては

絶対に見られない姿だ」と、教師のした仕事として評価してくれているのである。家庭学習も教師の指導のうちであり、学習意欲も教師が育成することができるのである。そして、これをきっかけとして学習習慣も身に付いていったのであった。

4●学級通信「なかま（第32号）」より

次に示すのは、初めて「サイコロ問題」を宿題として出した日の翌日、1973年5月22日に発行した学級通信の記事である。

さんすうの しゅくだい
せんせい



びっくり！
(はんさむごりら)
19にんのひとが だす。

きのう さんすうの しゅくだいを だしたが、きょう 19にんの ひとが もって
きた。そのひとは、せんせいの はなしを ちゃんと きいて いたんだね。とっても
いいことだ。

それに、まだまだ びっくり したことがある。

それは、もってきたひとが ものすごく べんきょう していた からだ。なかには、
10ぺえじ いじょうも やってきた ひとが いた。ほんとに びっくり したよ。

学級通信「なかま」第32号の大見出しは「さんすうの しゅくだい せんせい (はんさむごりら)、びっくり！ 19人のひとが だす」である。カットには、少々では驚かないといていた教師が、驚いている様子が描かれている。「はんさむごりら」とは、公立学校の新任時代に3年生の子どもたちが付けた渾名「ごりら」に、自分勝手な修飾語を付け加えた名前である。

記事の中には「きょう 19にんの ひとが もってきた。」とか、「なかには、10ぺえじ いじょうも やってきた ひとが いた。」などと、入学したばかりの1年生の子どもにも理解できるリアルな数字をあげて、子ども同士が影響しあい、学びあうための素材となることを期待している。

5●学級通信「なかま（第34号）」より

1日おいた5月24日の学級通信の記事は、新しく学習した足し算の式の表し方についてである。記事にもあるように、この日まで「2と5は、7」と書きあらわしていたのだが、この日からは「 $2+5=7$ 」と式の形で書きあらわすことになる。

この学習をすませた日の「帰りの会」で配布される学級通信で、子どもたちは、もう一度算数の学習内容を復習することにもなる。学級通信は、ただ配布されるだけではなくて、帰りの会などにおいて教師や子どもたちによって音読されるとよい。さらに、家庭に持ち帰られた学級通信が、子どもたちによって音読されて、その内容が保護者に伝わりはじめるとその効力はさらに大きくなる。

さんすうの たしざん
 $2 + 5 = 7$
 (たす) (は)

のうとに たくさん やろう！

→ あした、みせてくれ！

きょうは、あたらしい ことを ならったぞ。

いままで 2 と 5 は、7 というように やっていたけど、

$2 + 5 = 7$ とかいたら、すこし えらくなったような きもちは しないかなあ。

さっそく、おとうさんや おかあさんに おしえてあげよう。

そして、もし できたら(できないとおもうけど)、ほんの すこし べんきょうしてみてくれ。さいころや、きょうかしよでね。(もちろん、おかあさんに いわれなくてもね。)

前日までは「2と5は、7」と書き表していた足し算を、「 $2 + 5 = 7$ 」という式の形で書きあらわしはじめると、「えらくなったような」気持ちになるのが、小学校1年生である。

これは、教壇に立つ教師の実感であり、喜びでもある。多くの子どもたちが、そう感じてくれる。だからこそ、帰宅して「さっそく、おとうさんや おかあさんに おしえてあげよう」という一文が効力を持つ。

そして、上の記事の最後の2行には、現場教師ならではの思いが込められている。すなわち、「もし できたら (できないとおもうけど)」と、子どもたちへの挑発的な言葉が用いられている。さらに、帰りの会で、この部分は、教師が大きな声で2回くらい読んだり、子どもたちに読んでもらうことになる。

「できないとおもうけど」につづく「ほんの すこし べんきょうしてみてくれ」を読むころには、「少しじゃない、たくさんやる」という言葉も出はじめる。

さらに、「さいころや、きょうかしよでね」は学習方法を伝え、「もちろん、おかあさんに いわれなくてもね」は家庭学習への自主的な取り組み方を伝えている。

6 ●学級通信「なかま (第35号)」より

翌日の5月25日には、1年生になって使い始めた最初の算数ノートを終わりまで使い終わった子どもが出てきた。

さんすうの のうと
 つかいおわった ひとが いるぞ。

さんすうの けいさん
 $3 + 5 = 8$ は、
 みたら すぐに できるように なるう。
 ぱっ ぱっ と できるようにね。

じ は ていねいに かこう。
 あした、たくさん やってきてくれ。
 とくに、いままで やっていない ひと がんばろう。

学年始めに新しいノート配布することには、授業実践上の多くの意味がある。その第1は、その教科におけるノートの意義や使い方を、学年始めの第1日から一斉に指導することができるという点にある。第2に、配布した直後に、書くという学習活動が可能となり、その日のうちに宿題や家庭学習を出すこともできる。第3に、表紙に「自分の氏名」と「日付」、そして「だい1ごう」を書くことで、気持ちの上でも「学習の始まり」を感じ取ることができる。これらの3つの点を考え合わせるだけでも、「ノート活動を中心にした教科経営」には実践的な意味がある。(注3)

入学した子どもたちが学校に来はじめてから「35日目」、最初に算数ノートを使い終わった子どもが出てきた。その事実を、「さんすうの のうと つかいおわった ひとが いるぞ。」という見出しで伝えたのであった。この記事は、ほかの子どもの学習意欲に影響を及ぼさないわけにはいかない。この日以降、つぎつぎとノートを使い終わる子どもが出てくるのである。

7●子どものノート

ノートの使い終わりを学級通信の記事にした日の、子どもの日記である。(1973年5月25日)

5/25

さんすうの のおと(ママ)を ぜんぶ かきました。
ままと ばばが さんかい めを まわしました。(絵)

(栗原、朱書き)「よくべんきょうするもんだなあ。」

この子どもは、自分がノート「第1号」を終わらせた事実を「さんすうの のおとを ぜんぶ かきました。」と表現している。

このあとの1文が、じつはこの子どもが楽しい家庭で暮らしていることを教えてくれる。「ままと ばばが さんかい めを まわしました。」というのである。

栗原からのコメントは、「よくべんきょうするもんだなあ。」と、あくまでも「勉強をした事実」を賞賛することに留めている。

8●子どものノート

同じ日の、別の子どもの日記である。(1973年5月25日)

五月二十五日 はれ

ぼくは、がっこうから かえって さんすうの けいさんの れんしゅうを 五ページ しました。

おともだちと ボールあそびを ゆうがた 五じごろまで しました。

ぼくは、さんすうの けいさん れんしゅうが おもしろくなったので、よる ノートに さいころあそびを しているとき、おとうさんが かえってこられて おそいから もう やめなさい と いった。ぼくは ノートが おわるまで がんばりました。

おとうさんが よくがんばったね と ほめてくれました。(絵)

(栗原、朱書き)「おとうさんに、『べんきょうをやめろ』と いわせたとは すごいじゃないか。」

この子どもの日記は、家庭学習がどのように行なわれたかを教えてくれる。

まず、第1文は「ぼくは、がっこうから かえって さんすうの けいさんの れんしゅうを 5 ページ しました。」である。この文を読むかぎり、家庭学習は帰宅後すぐに取り組みられて、ノート「5 ページ」分ができあがっている。そのあと、友だちとボール遊びをした様子である。

その夜には「ぼくは、さんすうの けいさん れんしゅうが おもしろくなったので」、さらに家庭学習にとりくむことになった。重要なことは、この子どもが足し算の家庭学習を「けいさん れんしゅうが おもしろくなった」と表現していることである。学習方法がわかり、サイコロを振るという偶然性のある問題にとりくむことは楽しく「おもしろい」「あそび」活動なのである。子どもは「反復（繰り返し）」をいとわない。反対に、大人は、この反復活動を回避したがる傾向を持つ。小学校低学年を担当する教師は、このような子どもの心理を理解しておかないといけない。

さらに、この家庭では、楽しい出来事が展開される。

「さいころあそびを しているとき、おとうさんが かえってこられて おそいから もう やめなさい と いった。ぼくは ノートが おわるまで がんばりました。

おとうさんが よくがんばったね と ほめてくれました。」

この子どもは、父親に「おそいから もう （勉強を） やめなさい」と言わせている。その言葉を聞いたあとも、勉強を続けて、ノートを終わらせることができたのである。

栗原からの朱書きは「おとうさんに、『べんきょうをやめろ』と いわせたとは すごいじゃないか。」である。結局のところ、小学校1年生の子どもが学校に通い始めて30日あまりで、きちんと宿題や家庭学習はできるということである。

3 ■ 小学校2年生の自主学習の実態

栗原は、教職9年目に、1年生のときに授業中も騒がしくて授業が成立しづらい2年生の学級を担当することになった。入学以来1年の間、「騒がしい学級」で過ごしてきた新1年生は、2年生になって初めて教壇に立った栗原を注目することすらできなかった。しかし、徐々にではあるが、時計の針を気にしたり、チャイムの合図で席に着いたり、チャイムの前に学習の準備を済ませたり、日直の手で自主的に授業始まりが出来はじめて、2学期には積極的に学習活動に参加することもでき始めた。その年の実践は、『騒がしい学級の授業指導』としてまとめることができた。（注4）

その「騒がしい学級」の子どもたちも、学年始めからノートに番号をつけて、宿題や家庭学習の自立をねらうことにした。以下は、「騒がしい学級」の子どもたちの3学期の姿である。（注5）

実践ノート・学級会

ノートに番号をつける ―やる気は、まず、学習量から―

栗原昭徳

― ノート「ぜんぶあわすと23さつです」

二年生の女の子が次のような日記を書いてきたので、学級通信にとりあげた。

二月二十二日（金） かわの ようこ

きょう、国語ノート、社会科ノート、日記をそろえてみました。今つかっているものも入れて、国語ノート 八さつ目、社会科ノート 三さつ目、日記ちょう 十二さつ目でした。日記ちょうは、毎日かくから、一番多いです。社会科は、あまりしないので、やっと三さつです。

今から、またどんどんがんばります。

ぜんぶあわすと、二十三さつです。まだまだがんばります。

じぶんが、ほん気でやったべんきょうは、大じにしたくなるものです。かわのさんのノートは、たからものようにりっぱです。みんなのノートは、どうですか。

『どろんこ』（第一六四号）

第二学年の三学期半ばを過ぎた時点で、使用したノートが二十冊余りというのはけして多い数字ではないであろう。けれども、この子どもはノートを使い終わるという具体的な行動目標を立てることで、日々の学習活動をじつに意欲的に取り組んでいるのである。そして、その意欲は、文章にも表れているようにますます旺盛になりつつある。

このようにノートを終らせることに情熱を燃やしている子どもは、けしてひとりではないのである。

二 「国語のノートはいつのまにかなくなります」

同じ学級の子どもが、八日間で国語のノートを終らせた。ノートは、「十二マス」で、全六十ページの市販ノートである。ノートの内容（つまり、学習内容）は次のとおりである。

（○の中は頁数）

第一日 漢字①、板書視写②、教科書視写⑩。

第二日 板書視写①、意味調べ⑤。

第三日 お話づくり⑨、板書視写③、物語についての絵⑧。

第四日 板書視写③。

第五日 学習メモ②、教科書視写④。

第六日 漢字練習③。（鶴田いづみ、六冊目）

ノートを使っていない日が二日あるので、実質六日間で、一冊のノートを仕上げたことになる。子どもにとって一冊のノートを使用することは、大きな困難であり、多大な努力を必要とする学習作業なのである。

とっつもうれしそうだったので、「一冊おわせると、どんな気持ちがするか、書いてごらん。」といって、作文用紙を渡した。その子は、すぐに書いてくれた。

ノートを一さつおわらせて思ったこと

一部二年 鶴田 いづみ

「ガラスの中のお月さま」のかん字やガラスで作ったいろいろなものを書いていると、いつのまにか国語のノートがなくなってしまいます。どうしてすぐ国語のノートがなくなってしまうかという、わたしもよくわからないけど、わたしはこう思います。今ごろ学校からかえると「ガラスの中のお月さま」の漢字をよく書いたり、「ガラスの中のお月さま」

を国語のノートにうつしたり、文しゅうのお話づくりでながいお話を自分で考えて国語のノートに書いたからだと思います。ほんとうに国語のノートは、つかっていると、いつのまにかなくなってしまいます。

この子にとって、書くという仕事—それはとりもなおさず「勉強する」ことであるが—は、すでに日常茶飯事に変化してきている。そして、与えられた学習だけにとどまらないで、自分で探す学習へと進んでいるのである。

三 「四日で、つかいおわりました」

最近では、ノート一冊を四日で使い終った子どももでてきた。

ノートをつかいおわって思ったこと

一部二年 田中 まさよ

わたしは、国語のノート、一さつ四日で、つかいおわりました。一日に、かん字を、「十ページ」、やっていた間、あつという間にノート、九号目がおわったのです。ノートが、一さつおわった時、わたしは、心の中で思いました。

「えっ、もう九号目がおわったの、うそでしょ、」と。また、自分がやったノートを、くりかえして見ると、「うわあつ、ほんとだ!」と、思いました。

今は、「十号目」十七ページつかっています。今までやってきたべん強を、ふりかえって見ると、

○「ガラスの中の お月さま」のうつし。

○かん字

○国語の時間に、みんなで、べん強したことの、「こくばんのうつし」

いろいろなべん強を、ノートに、やってきました。こんど、ノートに、やって見ようとするのは、二つあります。

○みんなとべん強したことを、もう一どやる。

○きょうかしよを、読んで、気がついたことを、どんどん、書く。

こんなべん強を、こんどから、中心に、して行きたいです。

この子どもたちが、二年の最初からこのような学習を展開していたわけではない。そうではなくて、二学期の最初の「ノートには番号をつけてごらん」という教師のことばをキッカケとしているのである。

☆

今から九年前、私は初めて教職についた。その年、使用済みのノートを教室に積み重ねるという方法をとった。すると、一学期一五〇冊、二学期六八一冊、三学期四七〇冊以上、合計で一三〇一冊以上にもなったのである。三年生が平均ひとり三〇冊以上も使ったのである。六十冊以上もつかった女の子のひとり（現、高校二年生）は「はっきり覚えていませんが、みんなが頑張るからできたような気がします。」と電話の向こうで語ってくれた。

4 ■ 5年算数（草野実践）と論文執筆の経緯

2005年11月12日（土）福岡県行橋市立蓑島小学校において第8回北九州わかる授業研究会を開催した。その日の主要な研究内容は、会員の一人が行う福岡県生活科・総合的学習研究会で公開する生活科授業の模擬授業の実施と、公開当日の指導案の改善および指導技術の向上であった。その夜の懇親会の席において、本論（2）のファースト・オーサーとして執筆する草野啓顕先生が「論文を書くことになりました」と切り出した。じつは、その席には、教室実践からは懸け離れた論文の内容の素案が準備されていたのであった。

それに対して、栗原は「5年生だったら、2学期に分数の指導があるからそれをやったらどうか」と提案したのであった。直後に、5年算数教科書（下）の分数の部分をコピーすることになる。そのときのメモには、次のよう論文構成の素案が記されている。

宿題をめぐる教室の現状、教科書の音読（保護者のかかわり）
 教師の出す家庭学習=宿題
 子どもの見つけて行なう家での発展学習=自主学习
 ノートを中心とした教科の学習、教科経営

この日から、草野による算数科の「分数」授業の実践の準備と構想が始まったといっていよい。

2005年12月1日（木）、朝7時25分、栗原は、草野の勤務する小学校へ、以下に示すようなFAXを送信することになった。ちょうどその日から草野のノート指導を中心にした「分数」授業の実践が開始されることを知っていたからである。

「福岡県中間市立永犬丸小学校、草野啓顕先生

おはようございます。遅くなりましたが、5年の「分数」の家庭学習の活性化につながる学習活動について、今朝考えたことを以下に列挙してみたいと思います。

- まず、新しく「分数」単元に入る授業時間の最初に、新しいノートを配ることで。そして、ノートに「算数、自分の名前、スタートした日にち、第1号」などの文字をゆっくり、ていねいに書かせます。」
- 第1ページ目に、日付と教科書にある「分数を調べよう」という本時の学習の題名をていねいに書きます。
 このときも、机間指導をしながら、ていねいな文字、濃い鉛筆で大きく書いている文字、鉛筆の持ち方などを誉めることを忘れてはいけません。
- 算数ノートを、クラスの全員がそろって新しくしたことの訳（意味）を話してやりましょう。
 このノートは、授業で使うノートであるが、家での宿題や自主学习（自分で進んで取り組む勉強）にも使ってよいこと。

自分で考えて、どんどん勉強してもよいノートであること。

ノートに「第1号」と付けたということは、早く第1号を使い終わって第2号、第3号のノートに進んでよいことを伝える。

- 第1時の「等しい分数」の学習時間にも、ノートを使う場面を意図的に多くする。
たとえば、教科書の $1/2$ m、 $2/4$ m、 $4/8$ m、 $1/3$ m、 $2/6$ mの問題を視写する。ものさしを使って自分で、1の長さを10cmに決めて書いてみる。
みんなで勉強した結果の板書を、ノートに視写する、など。
- 算数ノートが使えるような宿題を出す。
「 $1/5$ と同じ分数を書いてくる。何個でも挑戦してみること。
もし、何か気付いたこと（発見したこと）があったら、それも書いておくこと。」
- 宿題を出したら、かならず翌日の朝、チェックすることです。
そして、忘れずに宿題をしてきた子どもをほめること。
さらに、何個できていたかも、事例をあげて紹介すること。授業で使うこと。
また、優れた内容があったら、算数の授業の最初に紹介することです。
- 教科書24ページの「2」の問題では、「 $1/2 \sim 5/10$ 」の間しか取り扱っていませんが、そのあとを、さらに10個ほど考える、など。
 $1/3$ や $1/2$ の問題も、教科書の範囲を超えて、発展的な部分をノートに書かせる。
- 教科書26ページ、第2時の「分母が同じ分数のたし算」では、練習問題③の6問をノートに書いて、解く。
このときに、ノートの使い方（数字の下の部分をノートの罫線にそろえる、スペースの取り方、教科書のページを書く、など）も指導する。
じょうずに書いている子どものノートをみんなで見ることも、うまい指導です。
さらに、宿題用の問題プリントを渡す。
このプリントは、B4用紙の四分の一の大きさにして、20問程度の問題を出す。（それを2種類作っておく）。
最初の日には1枚だけ渡して、ノートに書き写して問題を解くように指示する。
翌日朝、黒板に「宿題の答え」を書いておき、自分で赤丸をつけるようにする。
教師がチェックする。
- 宿題のプリントの1枚目を、帰りの時間などで解いて、自分で丸付けをする。
ノートに貼る。（プリントもノート学習の一部に位置づける。）
ハサミとノリは、大事な学習用具です。
- 2枚目のプリントを宿題に出す。
その翌日には、2枚目もプリントに答えを書き、合わせ、ノートに貼る。

- 教科書27ページの「引き算」も、たし算のときと同じように宿題を出す。
- 自分で問題をさがしたり、作ったりして、どんどん勉強を進めてよいことを伝える。先生がノートをチェックして、上手な勉強の内容や方法を誉めて、みんなに伝える。
- 学級通信でも、ノート学習の様子を伝える。

とりいそぎ、以上のことをお知らせします。
指導を進めながら、記録を取っておいてください。
また、FAX等で、たびたび連絡をしてください。

2005年12月1日（木曜）朝7時25分

山口大学教育学部
（自筆のサイン）

2005年12月15日（木）、草野先生より研究室へFAXが届く。

12月1日からの授業指導の過程や、子どもたちのノート活動へのがんばりの実態が報告される。子どものノートのコピーも届く。

同年12月17日（土）、「第9回北九州わかる授業研究会」における草野の言葉が感動的である。「ケンカばかりしていた子どもたちが、ケンカをしなくなった。

授業が変われば、子どもたちも変わる。」

2006年1月7日（土）、「北九州わかる授業研究会 in 佐世保」が長崎県佐世保市にて開催される。草野の実践発表は、ちょうど実践論文の執筆と並行した、「子どもの学習意欲を高めて学習習慣を身につけさせる指導方法の工夫～算数科におけるノート指導の工夫～」の口頭発表である。実際に、子どもたちが取り組んでいるノートも持ち込まれて、研究会に参加された現場教師もノートを目の当たりに見ることになる。

同年1月12日（金曜）締切の北九州市教育委員会が募集する「平成17年度 教育研究論文」に応募、提出をする。その際には、山下直子による強力なサポートがあったことをここに明記しておかなくてはならない。

同年3月4日（土）、「第11回北九州わかる授業研究会」において、草野論文が発表され、会員による協議を済ませた。発表テーマは「学習意欲を高め、学習習慣を身につけさせる家庭学習の在り方～家庭学習ノートの活用を通して～」であった。栗原は、草野発表のあとの講話において草野実践の解説を行った。

本論（2）は、このような経過を経て、出来上がったものである。

（注）

（1）栗原昭徳執筆「生活習慣・学習習慣」、恒吉宏典・深澤広明編『重要用語300の基礎知識

② 授業研究 重要用語300の基礎知識』、明治図書、1999年、p.151。

（2）原著は Lothar Klingberg “Abriss der Allgemeinen Didaktik” Volk und WissenVoikseigener Verlag 1968。その翻訳書、ロータール・クリングベルク著、佐藤

正夫監訳『現代教授学の理論』（授業研究全書4、明治図書、1978年刊）の70～72ページに詳しい。

- (3) 鳥取県西伯郡伯耆町立岸本中学校は、4年前から「学力向上」に学校をあげて取り組み、結果的には高校進学という形で多大な成果を挙げている。この中学校の「実践の3本柱」の一つが、栗原の提案した「ノート活動を中心とした教科経営」である。その取り組みの様子を論文化する作業が現在、進行中である。
- (4) 栗原昭徳著『“騒がしい学級”の授業指導——小学校低学年の学習集団づくり——』ぎょうせい、昭和62年刊（全240ページ）
- (5) 栗原昭徳「実践ノート・学級会 ノートに番号をつける——やる気は、まず、学習量から——」、『学校教育』1980年4月号（No.753）、72・73ページ。